

---

---

## ● 北 陸

### 響 敏 也

---

人に人柄があるように、街に「街柄」がある。

北陸という呼び名でひとくくりにするには、あまりに個性の判然とした福井、富山、金沢の3都市についてだが、その「街柄」については別の機会に譲るとして、この回は総論めいた話題から。

この時期、北陸と言えば当然のように「北陸新幹線」の話題が出てくることになる。この欄でも昨年の記事には、北陸新幹線について触れ、その文化芸術への波及効果を期待したり予測したり、さらには地元各地の思い入れも紹介した。富山と金沢はその沿線の都市として、福井は延伸予定線上の都市として、それぞれに開業を見守った。

そうして昨春の開業。折からの「鉄道ブーム」も相俟って、早々と25秒で初発の切符は売り切れ、観光客の利用は視覚的にも派手な効果を上げた。

人々の移動も盛んに行われているはずだ。なぜなら、各ホテルは軒並みに宿泊料金が上昇、予約もなかなか取れない状況が、年が明けても続いている。

そうした人の流れの効果が、文化芸術にどのように波及しているのか、特に音楽芸術に限れば、現在のところは「そういえば、少し数字に出ている」程度だという。具体的な例で言えば、フランスの都市ナントで始まって、日本では現在、東京・金沢・新潟・びわ湖で開催されている「ラ・フォル・ジュルネ（LFJ）」（熱狂の日音楽祭）に、福井も富山も、LFJ金沢と同期した関係都市と言えるのだが、北陸の関係者は「新幹線開通の効果と言えば、ある演奏家の東京公演を聴けない人が、こちらに流れてくるっていう効果はあるようです。目立って鮮明な数字に表れてくるでもなく、アンケート用紙に〈東京から来ました〉と書いてあったりするので解る。むしろ興味を覚えるのは、関西からのお客様が増えたこと。現状の北陸新幹線には直接の接触がない関西圏からの集客数が増えたというのは、面白いですね」という。将来、北陸新幹線が予定通りの全開通をした場合には、その重要な西の拠点都市になる大阪だが、まさかそれを見越しての集客増でもないだろう。新幹線の開通報道で、潜在していた北陸への関心が高まりLFJ集客にもつながったとみるのが自然だろう。

それぞれの街柄の各都市を眺めれば、福井の音楽拠点「ハーモニーホール」では、以前から『越のルビー音楽祭』など地元の音楽力に結び付いた企画が健闘、地力を付けつつある。こうした取り組みが第一線の音楽界の動向と直結してくる日が近い。愉しみだ。富山の『オーバードホール』の活動で注目すべきは、富山市が芸術監督システムを採っていること。全国の公営ホールを眺め渡しても、こういうシステムを採っている例は少ない。ちょうど新任の監督との入れ替わり時期に来たという。良い場面に人を得ての躍進を願う。

そして金沢。日本の都市群のなかで、もはや「音楽都市」の呼び名を不動のものとしている金沢だが、2015年も様々な角度から日本全国へ、あるいは世界に向かって独特の発信をしたと言える。なかでも名指揮者ミンコフスキーを首席客演指揮者に

迎え、その最初の定期が、2日間に渡ってのシューマン交響曲全集になったのは「快拳」。オペラの発信も例のごとく盛ん。井上道義と野田秀樹が手を組んだ、『フィガロの結婚』は、春秋2期に分けて全国に発信された。さらにLFJ金沢の、本家ナントにも負けない「独自性」と、それを保つ工夫も頼もしい。北陸3都市を眺めていると、日本の都市の実像が見えてくる。